

日暮庵は今は公民館として活用され、この日は子どもたちの書道教室が開かれていた。



豊前街道道路標識

### 天満神社

天満社といえば祭神は菅原道真。一富士、二鷹、三茄子などの敷石やライオン、牛などの像があり珍しい。樹齢六百年のサイカチは御神木。享保の大水害で流されたという鳥居の残骸が最近発見され、境内の傍らに無造作に積まれていた。

御社の由緒来歴蟬しぐれ

### 本願寺別府別院

史跡探訪といえば古刹が多いが、別院は新しく昭和七年の創設である。大谷光瑞が鉄輪で遷化したのを記念して本願寺別府別院に昇格したということである。境内に隣接する大谷記念館は、シルクロード大谷探検隊等の史料や記念品が集められている。二十年ほど前、敦煌、トルファン、カシュガル

等を旅したことを思い出させてくれる記念館だった。

炎天下の二時間半の行軍でかなり消耗したが、事前の注意にしたがって十分な水分補給をしながらの見学だったので落伍者もなく有意義な探訪だった。今更ながら、熟年シルバーパーワーのたくましさを感じさせられた。計画、準備、案内をしてくださった役員の方々にあらためて感謝したい。

### 市内探訪の記

川野 惣平

八月二十六日(日)

暑い。今日も朝から太陽がきらきら連日の猛暑のまた始まり。九時半に境川小学校正門前に集合となっていたが、木陰をぬってゆっくり歩こうと思えば早めに家を出た。会員以外の人も誘ってとあったが、私などが誘うのは高齢者ばかり、若し流行の熱中症にでもなったら責任が持てぬのでそれは止めた。

学校は、家からは下り、木陰も多いので足は軽い。時間より大幅に早く着いたが、着いてびっくり。せいぜい六、七名ではなかるうかと危惧していたが、なんと三〇名近く。私が

大きな声で挨拶すると大勢の挨拶が返ってきた。勿論矢島先生、三重野先生にも挨拶、資料を頂いた。

やがて熱暑中の散策、いや熱中行軍が始まろうとしている。皆の表情を見ると、市内史跡の探訪というより、史跡踏破と云った緊張感が伺える。時間。両先生の挨拶が終わると総勢四〇名近くがゆらぎ始めた。先ず校門から二〇米のところを流れている境川、その天満橋を渡りながら、ハンドマイクで川や橋の説明、渡り終えらるとすぐ川沿いの細い道を左折、森の生い茂った天満神社の境内に入る。

小さなお宮だが、勿論菅原道真公、学問の神様とあって一行皆参拝。今更何の学問の願いだらうかななどと不敬な思い。樹齡六百年と云われる「サイカチの木」、枝を張り中天に聳ゆ。太い幹の下に歌人田吹繁子の歌碑。

「この宮の森にあふぐ木さいかちと

知りてよりまつ花の咲く日を」

ご本人そっくりの胸像も境内にある。

歩いて五分程の所に別府大仏跡、私などまるきり方向の異なる浜脇にいたが、小学校の遠足で来る前に、一度遊びに来た覚えがある。老朽で取り壊した跡地には、「一生庵」が建立され、湯布院仏山寺の住職さんが、海軍同期で戦場に散っ



た一七〇柱の霊を祀って供養している。お堂に上がり座して説話を拝聴する。短い時間ではあったが、ユーモラスな冗談をまじえた老僧（八五歳）らしい説話であった。後が詰まっているので説話も中絶の格好で名残を惜しみ座を立つ。

一行は更に西に向かい、上りかげんの道をへて萬松寺に着く。「不許葦酒入山門」、境内石柱に刻まれた禅寺の格式に思わず襟を正す。お客があり、ご法事が始まったばかりの様子。ハンドマイクの説明を省き小さな声で要点のみ。でも今まで知らなかった萬松寺の由来を知り感無量であった。私事です、この寺は川野家の檀那寺であります。自分の檀那寺の由来も知らず、独り内心恥じ入り乍らのお参りでした。

道は日暮庵に向かう。周囲に背の高いアパートが立ち並び見落としてしまいそう。戦後間もなく母と共にこの付近に移住してから、毎日のように富士見通りや日暮庵前を通っていたのに、ここが豊前街道や両筑街道の要衝だとは勿論知らなかったし、またこの庵が私生まれ育った浜脇に縁のある崇福寺の分院であることも今回初めて知った。私事にわたり申し訳ない。

日暮庵を後に、駅前からの一方交通の狭い道を下がった。以前は右側に大屋根を持った木造の山下醤油があったが、今

は跡形もなく、ハイカラなアパートが幾棟も立つ。先頭を歩いていた矢島先生がハンドマイクを持ち上げた。左側の温泉の看板に注目とのこと。温泉出入り口の鴨居の上の、横二米ほどの古い看板、右から「野口中央温泉」と書かれ、「心華」と達筆の署名、晩年を別府で過ごした屈指の南画家、白須心華の書と説明。

温泉と同じ並びすぐ下手に甲斐家住居を見る。土蔵造りで商家とか、往時の野口界限を彷彿とさせる趣があった。

延命地藏尊前を低頭して通り、財間酒舗の前では島根から出てきた社長が、大正期に酒舗を開いた由。別府では、他県から来てまだまだ古い時期に店を開き、未だに続いている店がありそうなもの、何で財間酒舗だろうかと思ったりした。

そしていよいよ山田別荘、昭和五年に建てられたとのことだが、文人墨客が絶えなかったという。一行が庭から三三五五入って行くと、可愛い女兒が出迎えてくれた。女兒の母さんならしい若い女性が応対、直系にあたるのか先々代をおじいさ様と呼ぶ。説明では大書家の甲斐虎山の書が多く保存されているとか。可愛い女兒に別れを告げる。女兒は楓のような手を振ってニコニコ、またの再開を約した。

少し歩くと狭い路地、奥まった処に切石塀をめぐらした、

軒の低い暗い印象の日本家屋、秋吉邸。現在別府八湯で活躍されている河村健一さんの伯母さん秋吉方子さん、歌人の丸山待子さんなどの縁の邸、高浜虚子も宿されたそうである。なお方子さんが在世中は茶道表千家の大御所で、家で茶会などがあり、二度ほどお会いした記憶がある。

何と云っても、この行程のクライマックスは本願寺別院見学。本堂に参り積まれた印刷物などを頂き、大谷光瑞法主の写真などで当時は偲び、三度ものシルクロード探検の偉業を成し遂げた偉大さに感服。記念館共々見落としのないように拝観してまわった。

感動を抱いたまま、海門寺へと向かった。雷州という禅僧が災害の続く別府に、鬼門避けとして創建した堂宇。境内には、力強く幹をくねらせ枝を張ったクロマツ「志ぐれの松」に、芭蕉の

造り木の庭をいさむる時雨かな

と彫られた石柱が根っこにあった。

暑期中、多くの行程を説明、解説を頂き乍ら無事に最後まで辿り着くことが出来たのも、お二方の先生のご尽力に依るものと、厚くお礼を申しあげて海門寺公園でお別れした。

